

研究論文

男性保育士の受容についての課題

小田 進一

(2015年1月5日受稿)

抄録： 男性の保育者が、保育園で長く勤務し定着していくことに関する研究。男性が資格をもって保育所で働くようになり36年になるが、余り増えていない。保育士の質と量が求められている現在、この課題の克服が求められている。男性保育士の受容に関する意識調査と関係者への聞き取りを行うと、女性保育士への期待と厳しい現実認識、多様性について示唆があった。

I. 問題と目的

男性の保育士資格が認められて36年が経過する。政令改正後間もない時期の調査¹⁾では、男性保育者がどのように見られているかについて、「男性保育者と一緒に働きたいか」の問いでは、園長や保護者は男性保育士がいることについて積極的受容意思が表れていたが、女性保育者からは積極的な意見が見られなかった。その後、男性保育者が増加した時期の「男性保育者に対する態度」によると、男性の人数は増加したが周りからの見られ方は大きく変わらないことがわかる²⁾。また今日、WEB上で共有された男性保育士に対する意識や実態を基にした研究では、【職場環境の特殊性】に対して現場での共通理解と男性への相談支援の必要が指摘されている³⁾。男性が保育現場に入っていくことには本人の努力以上の問題がありそうである。名称の使い分けについてであるが、「男性保育士」は、児童福祉法上の資格名である「保育士」を基にしている。児童福祉施設で働く男性の保育士としての職名である。一方、「男性保育者」は、保育実践・保育事業に携わる男性職員に使われることが多い、従って幼稚園教諭についても使用される場合がある。

男性保育士の実数については正確には把握されていない。保育士が、保育所の他にも多様な環境

で勤務していることと業務独占でないことも関わっているであろう。1977年に男性にも保母資格が認められて以後、1986年は561名保育者総数の0.3%であったが、2015年現在は、9470名保育者総数の4.1%となっている。長谷による神戸市の例では、男性保育士が5年間で10倍になっており⁴⁾、全国的にも同じように男性保育士の数は増加傾向にあるのではないと思われる。しかし、平均勤続年数は女性保育士7.7年に対して4.8年と定着率が低い。(厚生労働省平成25年度「賃金構造基本調査」)

我が国における保育士不足は深刻な問題となった。厚生労働省は、2017年には約7万人の保育士が不足するとして、人材確保の施策等がとられるに至っており、男性保育士の進出と定着が期待される。また、家庭における「父親不在」の問題は、父親自身の社会的に深刻な状態が顕在化するなど多様な課題をはらんでいる。男性の育児参加の社会的気運を高めることを目的として発足した、平成22年より厚生労働省で取り組まれている「イクメンプロジェクト」のスローガン「育てる男が、家族を変える。社会が動く。」にみるように、男性・家族・社会の在り方の問題といえる。その意味で、男性保育士の定着進出の課題は必ずしも保育所(園)における男性職員個人の職業意識や個々

の男性保育士の「保育者としての資質」の問題とは言い切れず、広くこども家庭福祉の専門家たる保育士の今後の在り方として問われているのである。

男性の保育者についての研究の多くは、その専門性に焦点を当てている⁵⁾が、継続的に男性保育者について様々な角度から検討を重ねている中田の人間関係の問題に焦点を当てた研究⁶⁾では人間関係の象徴的な事例のポイントを2点挙げている。一つは、少数派の男性と多数派の女性の構図の問題で、少数派の男性は、男性性のシンボルを背負ってしまい孤立し排除されてしまったり、男性向きの仕事をさせられたり期待されたりする。次に、ジェンダーの問題である、男社会の中での男女の力関係の問題がある。男性保育者を特別扱いするなど、男性を管理者や専門家として扱うことでの女性の反発をまねくとする。また、男性保育士自身の自己像にも、2パターンあり、一つは男女関係無く専門職として自分を位置づけるものと、女性的役割を持った専門職でありながらも自らは男性としてのアイデンティティを求める場合であるとしている。このような関係性についての考察は男性の現状を俯瞰しており、重要な視点を提供している。

筆者らは、政令改正後10年(1989)の時期に「保育所における男性保育士の受容条件の検討」として、北海道の民間保育所(園)の園長・主任保育士・保育士および、保護者への質問紙調査と男性保育士のいる園の事例研究を行い、その存在と位置について一定の知見を得た。調査当時の男性保育者数は、0.3%と言われており、時を経て男性保育者数も増加している。

今日の状況を、男性保育者自身がどのように捉えているかを調べることとし、上記調査で得た知見を基にした男性保育者への質問紙調査を行った。あわせて、男性保育士出身者の園長と男性保育士への聞き取り調査を行った。

II. 方法

2011年11月第16回全国男性保育者研究集会富

山大会参加者を対象として質問紙による調査と男性保育士経験のある園長と男性保育士を複数在籍する保育園における聞き取り調査を行った。質問紙調査における質問項目は、上記調査のまとめとして指摘した事項を、質問項目とした用いた以下である。

- 1男性保育士資格取得の認知
- 2男性保育士の進出・定着度
- 3園長の採用意識
- 4主任保育士の男性保育者との協働意識
- 5女性保育士の協働意識
- 6男性保育士受入れと好意度
- 7保護者の積極的な評価
- 8父子家庭での男性保育者期待
- 9女性保育士の協働意識
- 10女性保育士の期待度
- 11園長の男性保育士採用への戸惑い
- 12保育経験者が経営者になることへの期待

III. 質問紙調査の結果

回収は78名。

対象者の属性

所属

保育所67名、認定こども園1名、幼稚園4名、行政1名、その他9名

職名

保育士70名、幼稚園教諭2名、その他の専門職2名、その他8名

経験年数

3年未満9名、5年未満12名、10年未満19名、20年未満23名、20年以上15名、NA 4名

質問1	男性が保育士資格を取得できることは世間に広く知られている							
そう思う	79	96%	そう思わない	2	2%	どちらともいえない	1	1%

保育士資格取得にほぼ疑問はない。

質問2	男性保育者の進出・定着の度合いは現状より少ないと思われる							
そう思う	52	63%	そう思わない	25	35%	どちらともいえない	5	6%

社会進出・定着は、現状より多いと思われる

るとの答えが3割もいることの意味は、現状の厳しい状況が知られていないことを表していると思われる。

質問3 園長の半数ぐらいの人が採用したいと思っている								
そう思う	35	43%	そう思わない	35	43%	どちらともいえない	12	15%
☆より多い 6 より少ない 17								

「そう思わない」35人43%のうち、「より多い」6名、「より少ない」17名、「そう思う」に35名に、「より多い」の6名を加えると21人となり、半数が園長の採用意思への期待があると考えられる。園長の採用意思への評価は分かれている。

質問4 主任保育士の多くが共に働きたいと思っており、消極性も低い								
そう思う	35	43%	そう思わない	31	38%	どちらともいえない	16	20%

そう思わない31名38%、どちらともいえない16名20%と、主任保育士の協働意思への評価は高くない。

質問5 女性保育士は、男性保育者がいない状態に不自由はないと思っている								
そう思う	57	70%	そう思わない	20	24%	どちらともいえない	5	6%

約1/4のものが、女性保育士からの期待を表明している。

質問6 男性保育者受け入れに積極的なものは、男性保育者に好意的								
そう思う	68	82%	そう思わない	9	11%	どちらともいえない	5	6%

ほぼ設問と同じように考えられている。

質問7 男性保育者の「いる園」と「いない園」を比較すると、「いる園」の方が保育内容・人間関係・適正・保育者観に不安が少なく積極的な評価を与えている								
そう思う	61	74%	そう思わない	14	17%	どちらともいえない	7	9%

「そうは思わない」14名「どちらともいえない」7名を合わせると、21名全体の25%が、男性保育者体験が積極的評価に必ずしもつながらないと答えている。保育士の質にかかわるといふことか。

質問8 父親のいない家庭で、男性保育者の存在の必要性が期待されているとは言えない								
そう思う	30	37%	そう思わない	49	60%	どちらともいえない	3	4%

男性保育者の父性的役割期待には、どちらかというと批判的。

質問9 男性保育者と働きたいと思っている女性保育者は全体の4割								
そう思う	32	39%	そう思わない	39	48%	どちらともいえない	11	13%

女性保育者の協働意思の設問だが、回答が多様に読み取れる。設問の訂正が必要だ。

質問10 女性保育者に、保育内容の質向上に男性の保育参加が必要だという自覚はない								
そう思う	34	41%	そう思わない	41	50%	どちらともいえない	7	9%

そう思わない41名50%と、この質問に対して否定的ないし消極的な印象の意見が多く見られ、女性保育士からの期待感を感じている男性保育士が少なからず存在する。

質問11 園長は、男性保育士採用について、将来にわたっての身分保障や経済的保障に不安が多く悩んでいる。								
そう思う	52	63%	そう思わない	23	28%	どちらともいえない	7	9%

園長の採用意思に約3割が疑問、採用への関与などの課題も予測される。

質問12 保育経験者が保育の責任者となり経営者となることが期待されている。								
そう思う	59	72%	そう思わない	17	21%	どちらともいえない	6	7%

必ずしも保育の経験と経営とはつながらないとの意向も無視できない。

IV. 聞き取り調査の結果

(1) 保育士経験のある園長

男性保育士の実態を知っている人が園長であれば、より男性保育士受け入れの条件を整えられるのではないかということについて、20年余の保育経験を持つ園長のもと、男性を開園当時より1名、現在は2名受け入れている横浜市A保育園。女性集団の中に男性保育士が入っていくと違和感があるが、開園当時から男性がいることで女性も男性を自然に受け入れることができている。園長は、男性保育士には専門的に関わって欲しいが、同時に男性の特徴を発揮して欲しいともいう。男性

保育士自身は、男性保育士が園長であることに特段に意識してもいないことから、園長の配慮や理念が、男性保育士にとって職継続に影響しているとは考えにくい。

(2) 複数の男性保育者が在籍する保育園の保育士

札幌市内のB保育園では、21年前に男性保育士を受け入れ、その後継続的に男性が在籍している。同法人では男性保育士の必要性について、活動的な保育内容をとっているという点で男性保育士を採用することのねらいを明確にした受け入れをしている。この園の特徴としては、男女ともに年齢の違う多様な保育士がおり、その保育士たちは、協働協調し、また、園長は細かなことは言わず受容に努めているところにある。園長によると、特に新人保育士には、育てる意識で援助しており、職員の中には新人・男性に厳しく指導する保育士もいるが、園長はそのような存在も双方に認めている。

働く3名の保育士からのヒアリングによれば、2年目の保育士は、慣れるまではじめは困難さも意識しておらず、たくさん間違いをしたが、いちいち指摘することなく気づくようになってくれたことが良かったということ。11年目の男性保育士は、仕事についてわからないことばかりで、毎日子どもと遊ぶのが精一杯だったが、ひとつ上の男性保育士と男性保育士の集まりにでかけることで支えられ、身近な所に先輩（男子）がいたことが続けられたことに大きく影響しているということ。21年目の男性保育士は、同園の前に7年の経験があったものの、入ったころは自分を発揮することができず、5年後クラス担任を持って、職員に認められ、はじめて本来の自分を出せのびのびと働けるようになり、それまでの5年間どのように保っていたのかということ、男性保育士の集まりで他園の男性保育士と様々なことを本音で話す機会があったことが良かったとのことだった。

V. まとめ

過去に保育関係者の意識を調査し得た知見由来の質問項目であったが、園長の採用意向や主任の協働意欲などに対して評価が低く慎重である傾向が見られた。同僚である女性保育士からの期待を意識しているようでもある。回答者は、保育経験5年未満が26%、10年以上46%と、男性保育者の勤続年数を超える経験豊かな男性の保育者が答えた結果としては厳しい現状認識と期待の混在という男性保育士の実情の一端が表れているといえるが、質問項目に不明確な部分があり、今後精査が必要だ。また、聞き取り調査からは、男性で長く勤めるには決定的な要因があるということだけでなく職場環境の多様性が条件として考えられた。

保育士自身が保育現場における特殊性について、人間関係的課題をどのように意識し、実践主体として現状と展望を持とうとしているかについてさらに取り組んでいきたい。

文 献

- 1) 永田勝彦, 小田進一, 西塔正一: 保育所における男性保育者受容の検討. 日本社会福祉学会第37回大会報告要旨集, 122-126, 1989.
- 2) 菊池政隆: 男性保育者に対する態度. 保育学研究, 40 (2): 17-13, 2002.
- 3) 高木邦彦: 男性保育士を取り巻く困難と課題の検討. 日本保育学会第67回大会発表要旨集, 1023, 2014.
- 4) 長谷秀揮: 男性保育者の現状と課題についての一考察. 日本保育学会第61回発表論文集, 2008.
- 5) 木下比呂美・斉藤政子: 男性保育士と子どもの発達. 保育情報, 246: 31-38, 1997.
- 6) 中田奈月: 「男性保育者」の創出—男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響—. 保育学研究, 40 (2): 196-204, 2002.

Challenges in the Acceptance of Male Nursery School Teachers

ODA Shinichi

Abstract: This study examines the long-term employment of men as nursery school teachers and their retention. It has been 36 years since it became possible for men with the required qualification to work at nursery schools, but they are still few in number and have not increased. Currently, this issue, as well as the issue of improvement of the quality and quantity of nursery school teachers, needs to be addressed. Attitude surveys about acceptance of male nursery school teachers were conducted, revealing issues involving expectations of female teachers.

